

# 建文帝の諡号について (2)

Evaluating Ming Emperor Jianwen  
from the Perspective of his Posthumous Title (2)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## (1)

永樂帝以後、明代では建文帝はどのように取り扱われたのか。(1) では、建文帝だけでなく、その臣下に対する議論もふくめて検討してみたい。

### ①永樂年間

陳建（字は廷肇，号は清瀾。廣東東莞の人。弘治十年（一四九七）～隆慶元年（一五六七）。嘉靖七年（一五二八）の舉人）の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』によると、南京に入城した永樂帝は、洪武三十五年（一四〇二）六月乙丑に建文帝の文官の姦臣として、二十九人の名を貼りだした。それより先に、これらの人物を捕らえたものには、昇進させるとの告示をおこなう。すると、それに乗じて官職を得る者が大量に出た。また、捕捉を名目に私怨をはらし、財物を略奪するものが多かった。禁止したが、止めることはできなかった。名前を張り出された鄭賜・王純・黄福・尹昌隆は、姦臣に引きずり込まれたと弁明し、赦しを請い、元の官に復帰した。張統も赦され、もとの吏部尚書になった。しかし、他の人たちは赦されなかった。そして、名簿（姦臣榜）を朝廷に張り出し、徐輝祖・葛誠・周是修・鐵鉉・姚善などを増して五十一人としたという。

是の日（洪武三十五年六月乙丑）、燕王（永樂帝）掲榜して、左班する文職の姦臣を討つ、計二十九人なり。〔それは〕太常寺卿の黄子澄・兵部尚

書の齊泰・禮部尚書の陳迪・文學博士の方孝孺・副都御史の練子寧・禮部侍中の黃觀・大理少卿の胡閏・寺丞の鄒瑾・戸部尚書の王純・侍郎の郭任と盧迥・刑部尚書の侯泰と暴昭・工部尚書の鄭賜・侍郎の黃福・吏部尚書の張統・侍郎の毛泰亨・給事中の陳繼之・御史の董鏞と曾鳳韶と王度と高翔と魏公冕と謝昇・前御史の尹昌隆・宗人府經歷の宋徵と卓敬・修撰の王叔英・戸部主事の巨敬なり。是れより先、賞格（褒賞）を出だし、凡そ文武の官員・軍民人等、姦惡を綁縛するに首と爲る者は官三級を升し、從と爲る者は二級を升す。叛逃する官吏を綁縛するに首と爲る者は二級を升し、從と爲る者は一級を升す。有司<sup>う</sup>奉けたる旨もて出示（告示）せよ。是れより擒獲して官を得る者は甚だ衆し。機に乗じて私讐を報復し、財物を劫掠するもの紛紛たり。禁ずると雖も、止むる能わざるなり。既にして、鄭賜・王純・黃福・尹昌隆 皆な迎駕して歸り、姦臣の累する所と爲ると自陳し、罪を宥<sup>ゆる</sup>されんことを乞う。[そこで] 其の官に復さしむ。茹瑞・李景隆の言を以て、並びに張統を宥し、復た吏部尚書と爲す。極は皆な宥さず。尋いで復た姦臣榜を朝堂に掲げ、徐輝祖・葛誠・周是修・鐵鉉・姚善等を増し、共に五十一人とす（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之三・「壬午洪武三十五年 即建文四年・六月」条）。

永樂帝は、この後、

燕王（永樂帝） 清宮すること三日。諸々の宮人・女官・内官 多く誅死す。惟だ罪を建文に得る者は乃ち留まるを得（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之三・「壬午洪武三十五年 即建文四年・六月」条）。

に始まり、建文帝にかかわった官僚とその一族を肅清してゆく。

肅清の途中の洪武三十五年（一四〇二）八月丙寅に、永樂帝は、建文の時の上奏文千余通を得た。

上（永樂帝） 宮中に於いて建文の時の群臣の上つる所の封事千餘通を得。一二を披覽するに干犯する者有り。翰林院侍讀の解縉等<sup>など</sup>に命じて徧く閲ましめ、軍馬・錢糧の數目に關係するは則ち留め、餘の干犯する者有れば、

悉く之を焚く。既にして従容として〔解〕縉等<sup>など</sup>に問うて曰く、「爾等 宜しく皆な之れ有るべきや」と。衆 稽首して未だ對えず<sup>こた</sup>。脩撰の李貫 進みて曰く、「臣 實に之れ無し」と。上（永樂帝） 曰く、「爾 獨り為す無きを以て賢たらんや。其の祿を食せば則ち其の事に任ぜらるるを思い、國家危急の際に當れば、近侍に在りて獨り一言無きは可なるか。朕（永樂帝） 夫<sup>か</sup>の心を建文に盡す者を惡むに非ず。但だ建文を導誘して祖法を壊ち・政經を亂せしを惡むのみ。爾等 前日の彼に事えれば則ち彼に忠たり、今日 朕（永樂帝）に事うれば、當に朕（永樂帝）に忠たるべし。必ずしも曲さに自ら遮蔽せざるなり（『大明太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝實錄』卷之十一・「洪武三十五年八月丙寅」条）。

上奏文には、永樂帝を罪するようなことが書かれていた。そこで、解縉などにすべて読ませて、軍事・財政などに関するもの以外は、すべて燃やした。そして「これらの上奏文は、取り置いておくべきだったか」と問うた。李貫が、「自分は〔永樂帝を罪するようなこと〕はしておりません」という。すると、永樂帝は「行なっていないということで善いことだとできるのか。その職につけば、その職のことを思う。國家危急の時には、側にいて一言もないのは可であろうか。建文帝に心を尽くした官僚を憎むことはない。ただ、建文帝を間違った方向に導き、政治を混乱させたものを憎むのである。建文帝に忠義を尽くしたのならば、自分（永樂帝）に忠義であろう」、という。

洪武三十五年（一四〇二）十一月甲辰になって、陳瑛が、建文帝に忠を尽くした官僚であったとして黃觀・廖昇・王叔英・周是脩・王良・顏伯偉などを弾劾するが、永樂帝は、認めなかった。

都察院副都御史の陳瑛 言う、皇上（永樂帝）は「天に順い人に應じ」（『易』革卦・彖傳），以て天下四方を有ち、萬姓 率復せざるは莫し。然れども車駕 初めて京師に至り、命に順わず、死を建文に效す者有り。禮部侍中の黃觀・太常寺少卿の廖昇・翰林院修撰の王叔英・衡府紀善の周是脩・浙江按察使の王良・沛縣知縣の顏伯偉等の如きは、其の存心を計るに叛逆と同

じきなり。宜しく之を追戮（死者に対して恥辱を加える）すべし。上（永樂帝）曰く、朕（永樂帝）初めて舉義し、姦臣を誅するは、齊〔泰〕・黃〔觀〕の數輩に過ぎざるのみ。後來の二十九人の中の張統・王鈍・鄭賜・黃福・尹昌隆の如きは、皆な宥<sup>ゆる</sup>して之を用う。今、汝の言う所の數人、況んや二十九人の數に與<sup>あずか</sup>らざる者有り。彼れ其の祿を食し自から其の心を盡す。悉く問うこと勿れ、と。蓋し上（永樂帝）初めて京城に入るに、〔廖〕昇及び〔周〕是脩は自經して死す。〔黃〕觀は時に安慶を守り、江に投じて死す。〔王〕叔英は廣德を守り、自經して死す。〔王〕良は官に在りて家を闔<sup>とざ</sup>して自焚す。是れより先、上（永樂帝）の兵 沛縣に至るに、〔顏〕伯偉 下るを肯ぜず其の子と俱に死す。後、〔陳〕瑛 方孝孺等の獄詞（供述）を閲て、遂に〔黃〕觀・〔王〕叔英の家を簿錄（官に没収）とす。妻女は皆な將に給配されんとするに、〔黃〕觀の妻 通濟門を出で、先ず其の二女を河に擲<sup>おと</sup>し、遂に自ら沈めり。〔王〕叔英の二女は皆な笄（成人）なり。錦衣衛の獄に就きて俱に井に赴きて死す（『大明太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝實錄』卷之十四・「洪武三十五年十一月甲辰」条）。

なお、陳建の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』には、以上の文の前に、前の北平按察使の陳瑛を召して京に至らしめ、以て都察院右副都御史と爲す。初め〔陳〕瑛 藩邸に交通するに坐して、廣西に謫せらる。上（永樂帝）即位し、首に之を召し用う。〔陳〕瑛 建文の諸臣を怨むこと最も深し（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之三・「壬午洪武三十五年 即建文四年・八月」条）。

とある。陳瑛は個人的に建文帝に仕えた官僚を怨んでいたとする。

陳瑛は『明史』で「奸臣傳」に分類され、「建文元年、北平僉事に調さる。湯宗 〔陳〕瑛の燕王（永樂帝）の金錢を受け、密謀に通ずと告ぐ。〔そのため〕廣西に謫せらる。燕王（永樂帝）帝を稱し、召して都察院左副都御史と爲し、院事を署す…天性 殘忍なり。帝の寵任を受け、益々務めて深刻にして、専ら搏擊（罪に陥れる）を以て能と爲す」（『明史』卷三百八・列傳第一百九十六・

奸臣傳)といわれる人物であったようである。

また、その四年後の永樂四年(一四〇六)につぎのようなことがあった。

[永樂四年十一月] 辛巳、戸部人材の高文雅 時政を言うに首に建文の事を挙げ、次に救荒・卹民に及ぶ。言辭 率直にして忌諱する所無し。上(永樂帝) 禮部に會官し議して之を行うを命ず。都御史の陳瑛等は其の言狂妄なりと奏劾(上奏して検挙する)し、之を寘(処置)せんことを請う。上(永樂帝) 曰く、草野の人 忌諱するを知らざれば、恕す可きなり。其の中の言 採る可きもの有り、以て直ちに之を廢すること勿れ、と。又た尚書の鄭賜を召して諭して曰く、直言を罪せざれば、則ち忠言進み・諛言退く。古より諫むるを拒むの事は明主 為さず。卿 當に朕が心を體し、今後の事を言う者は但だ其の用うる可きや否やを觀よ。人の見る所は同じからず。若し拂逆なること有るも、罪を加える可からず。[陳] 瑛 刻薄にして、朕を助けて善を為すに非ざる者なり。卿等 之を戒しめよ。[高] 文雅は、吏部に付し才を量りて官を授く可し、と<sup>(1)</sup>(『大明太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝實錄』卷之六十一・「永樂四年十一月辛巳」条)。

高文雅が時政を述べた最初に建文帝のことを持ち出したのである。ここでも、陳瑛はそれを非難するが、かえって永樂帝に批判される。そして、高文雅は、官を授けられたという。

ここで、永樂帝は、洪武三十五年(一四〇二)六月乙丑の姦臣(姦黨)のブラックリストに載せられたものの、言いつくろって赦された工部尚書の鄭賜を

(1) 余繼登(字は世用、号は雲衢・澹然軒。直隸交河の人。萬曆五年丁丑科(一五七七)三甲二十五名の進士)の『典故紀聞』(卷七)は、ほぼ同じ。

『國權』は、節約して次のように述べる。

[永樂四年十一月] 辛巳、戸部人材の高文雅 時政を言うに首に建文の事に及び、次は救荒恤民なり。其の語 率直なり。左都御史の陳瑛は其の妄を劾し、吏に下さんと欲す。上(永樂帝) 曰く、草野の忌諱するを知らず。其の言を採り、廢すること勿れ、と。吏部に下して官を授く(『國權』卷十二・「成祖永樂四年・十一月辛巳」条・九八一頁)。

召しだして、「事を言う者は但だ其の用うる可きや否やを觀よ」と登用の仕方を述べている。そのなかで「人の見る所は同じからず。若し拂逆なること有るも、罪を加える可からず」といっているのはあてつけだったのだろうか。

さて、高文雅は、どのように建文帝のことを述べたのかははっきりしないが、永樂帝はそれを容認したのである。

ここでも、永樂帝は、建文帝に関することに対して寛容であるように描かれている。

そうして、陳建の『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』によると、永樂十一年（一四一三）に、姦黨の練子寧と姻戚関係にあった錢習禮のことから、つぎのようなことになったという。

〔永樂十一年正月〕敕諭もて姦黨の齊〔泰〕・黄〔觀〕等の遠親の未だ<sup>とら</sup>擧えられざる者は、悉く皆な之を<sup>ゆる</sup>有し、來告する者有るも論ずる勿れ。時に翰林庶吉士の錢習禮は、江西吉水の人にして、練子寧と姻婭有り。是れより先、姦黨を治むに逮び、〔錢〕習禮 偶たま免れるを獲。然れども恒に郷人の持する所と爲る。〔錢〕習禮 自ら安んぜず、以て學士の楊榮に告ぐ。乘間（時をみはからって）以て聞す。上（永樂帝） 欣然として曰く、練子寧をして今日の此に在らしめば、朕 固より當に之を用うべし、況や〔錢〕習禮をや、と。即日 令を下して禁止す。是に於いて黨禁 漸く解く（『皇明歴朝資治通紀』卷之七・「癸巳永樂十一年正月」条）。

建文帝にくみした人物（姦黨）の遠い親戚まで逮捕の命令が出ていた。だが、姦黨の練子寧と姻戚であった翰林庶吉士の錢習禮は、たまたま逮捕を免れていた。時をみはからって、そのことを永樂帝に告げてもらった。すると永樂帝は、練子寧が生きていれば登用した、まして錢習禮を用いないことがあろうか、といい、即座に逮捕の命令を取りやめさせた。ここから、ようやく姦黨（姦臣）に対する禁止令が緩やかになってきたというのである。

また、『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』によれば、永樂十三年（一四一五）の五月には、つぎのような上諭が出される。

〔永樂十三年〕五月、三法司に上諭ありて「如今、各處に妄りに姦惡を告ぐる<sup>もの</sup>的有りて、好みて良善を擾すを生ず。今年の五月初八日より以前、但だ姦惡と被告され、已に官に提到する及び未だ提到せざる<sup>もの</sup>的有れば、都て<sup>ゆる</sup>饒し問わず。今後、但だ指すに姦惡を以て事を生ずるに由りて、良善を擾害する<sup>もの</sup>的有れば、之を罪して<sup>ゆる</sup>饒さず」と（『皇明歷朝資治通紀』卷之七・「乙未永樂十三年五月」条）。

妄りに建文帝にくみした人物（姦黨）だと告発して、善良な人たちを陥れることがある。そこで、告発された者はゆるし、善良な人たちを陥れた者は罰するという。

姦黨（姦臣）に対する禁令も、永樂十年を過ぎるころから、すこしは緩やかになってきたのであろうか。

## ②洪熙年間

『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』によると、永樂二十二年（一四二五）十一月朔に、帝位についたばかりの仁宗洪熙帝は、つぎのようにいう。

〔永樂二十二年〕十一月朔、建文の姦黨の族屬を赦し、並びに家に放還（釈放）し、田産を給還（返還する）す。是れより先、上（仁宗洪熙帝）侍臣に謂いて言う、「方孝孺の輩は皆な忠臣なり、宜しく寛に従いて典すべし」と。次日、御答もて禮部尚書の呂震に付して曰く、「建文中の姦臣は、其の正犯は已に悉く顯戮を受け、家屬は初め教坊司・錦衣衛・浣衣局に發し、並びに匠を習わし功臣の家に及び奴と爲す。今、存する者有れば、既に大赦を経て、<sup>ゆる</sup>宥して民と爲し、田土を給還（返還する）す可し。凡そ前に言事の當を失いて謫され充軍と爲る者も、亦た宥して民と爲せ」と。

按ずるに、初め姦黨を治めるに、齊泰の一子は甫て六歳にして、給配さる。是に至りて宥さるを得て郷に還る。黃子澄の一子は姓を易えて難を逃れ去り、共に湖廣の咸寧に田家（農家）と爲る。是に至りて、宥さるるを経て、乃ち姓を復す。辛巳（正徳十六年〔一五二一〕）の進士の黃表は、

其の後なり。故に齊[泰]・黄[子澄]の裔は猶お絶えざるがごとし。方[孝孺]・練[子寧]は則ち無し。餘の諸人は悉くは考える可からず（『皇明  
歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之九・「甲辰永樂二十二年十一月朔」条）

①永樂帝は、永樂二十二年七月に亡くなっている。

仁宗洪熙帝は、方孝孺などは忠臣なので、赦して祭祀すべきだという。その翌日には、建文帝にくみした人物（姦黨）の主なものすべて誅に服し、それらの一族は、官に没収した。いま、生きているものがいれば、民に戻して、田土を与えよという。こうして、十一月一日に、建文帝にくみした人物（姦黨）の親族を赦し、帰郷させて、田土を返還した。

陳建は、齊泰・黄子澄は子孫が残ったが、方孝孺・練子寧の子孫は残らなかった。その他のものは、よく分からないと付け加える。

仁宗『實錄』では、

癸卯、上（仁宗洪熙帝）建文の奸臣の齊[泰]・黄[子澄]等の外、親みづから全て戍邊する者を調べ、田の郷に在るもの悉く荒廢する有りと聞き、兵部に令して每家に一丁を戍所に存し、餘は放ち歸し民と為す（『大明仁宗敬天體道純成至德弘文欽武章聖達孝昭皇帝實錄』卷之五上・「永樂二十二年十二月癸卯」条）。

となっている。

### ③正統年間

祝允明（字は希哲、号は枝山。江蘇長洲の人。天順四年（一四六〇）～嘉靖五年（一五二六））の『野記』によると、正統七年（一四四二）十月に、次のような対話がなされたという。それは、太皇太后（仁宗洪熙帝の皇后）の病が革まった時（張太皇太后は正統七年（一四四二）十月十八日に崩じている）、内閣の大臣を召しだし、まだ議論されていない大事を問うた。すると、楊士奇が、「實錄」編纂にあたって建文の年号を用いるべきこと・方孝孺に対する文字の禁を弛めるべきことの二点と「云々」とのみ記される事の三つを持ち出し



た。張太皇太后は、黙然として答えなかったが、楊士奇等は遺命を受けたとして退出したというのである。

太后 [疾] 大いに漸み<sup>すす</sup>三楊（楊士奇・楊榮・楊溥）を榻前に召す。[そして] 朝廷に尚お何れの大事の未だ辨ぜざる者有りや、と問う。楊士奇 對えて曰く、一二の事有り。其の一は、建庶人（建文帝） 已に滅すと雖も、曾て臨御（天下を治める）すること四年なり。當に史官に其の一朝の「實録」を脩むを命じ、仍お建文の年號を用うべし、と。太后 曰く、曆日は已に之を革除す。豈に復た用う可けんや、と。[楊士奇] 對えて曰く、曆日は一時に行なわれ、[「實録」は:]『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』によって補う] 萬世の信史なり。豈に洪武の年を蒙りて以て實を亂さんや、と。太后 之に頷く。其の二は [云云：王世貞『弇山堂別集』によって補う]、と。后 亦た首肯す。其の三は、方孝孺 罪を得、已に誅さる。太宗皇帝（永樂帝） 詔もて其の片言隻字なる者を収めて死を論ず。乞うらくは其の禁を弛め、文辭の國事に係らざる者は、聽して存して之を傳えんことを、と。太后 黙然として未だ答えず。三公 [楊] 士奇等 即ち趨<sup>すみや</sup>かに下りて叩頭し、臣等 謹みて顧命を受くと言ひ、遂に出づ（『野記』二卷・二十三葉）。

陳建は、『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』でこの『野記』を引用し、つぎのようにいう。

[陳建] 按ずるに、此に記す楊文貞（楊士奇）の對<sup>こた</sup>うる所の言議（議論）甚だ正し。第だ當時に果たして此の言有るや否やを識らず。竊かに疑うに文貞（楊士奇） 累朝の元老にして、洪熙より來 即ち君の行志を得、言の聽かれ、計の従わる。果して此の意有らしむれば、何ぞ仁 [宗]・宣 [宗] の二祖の時に之を言わざらんや。何ぞ正統の初年に之を言わざらんや。直ちに大後の崩ずるに臨むを待つのみ、亦た耄期（高年）にして瘁<sup>う</sup>に倦み、乃ち之を言うや。枝山（祝允明）の此の記は、當に傳聞に出づべし。然れども其の詞誼（意味するところ）は則ち甚だ確なり、正論の赤幟と爲すに

足る。方氏（方孝孺）の文字 久しく已に梓行（出版）を禁ずるを馳<sup>お</sup>う。

第だ首の一事のみは尚お待つこと有るのみ（『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十三・「壬戌正統七年七月」条）。

陳建は、楊士奇の意見はきわめて正しいが、当時このような議論がなされたのかを疑う。祝允明の記録は伝聞に出ているのだろう。しかし、楊士奇の意見は正論のうち、方孝孺の文字の禁は解かれたものの、建文の年号の復活はまだなされていない、と付記するのである。

また、王世貞（字は元美、自号は鳳洲、又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。嘉靖五年（一五二六）～萬曆十八年（一五九〇）。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）の『弇山堂別集』によると、以上の逸話を引用した後に、

按ずるに、張太后の遺詔 今に存す。未だ此の三事有るを聞かざるなり。  
即<sup>も</sup>し之れ有らば、何ぞ「實録」を以て遺して修めざらん。『孝孺集』は成化の時に至り始めて出づ（『弇山堂別集』卷二十三・史乗考誤四）。

という。張太皇太后の遺詔が遺されているが、この三事があったとは聞かない。もしあったのならば、どうして「實録」に書かないのか。疑わしいという。また、方孝孺の文集は成化年間になって出るようになったと述べる。

#### ④天順年間

天順元年（一四五七）十月になって、英宗は、宮中に幽閉されていた建文帝の次子の建庶人など十八名をゆるして、鳳陽の地に住ませた。

『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』は、つぎのように伝える。<sup>(2)</sup>

建庶人を遣りて出だし鳳陽に居らしむ。[建] 庶人は建文君の次子なり。是れより先、上（英宗） 北狩し（土木の変でオイラートに捕虜になったこと）、嘗て建文君の没して、禮を加うる所無く、[また英宗自身が] 屢しば變故を召くを憫れみ、以て[捕虜になった先ですと付き従ってくれる] 袁彬<sup>つ</sup>に語ぐ。既に位に復し、因りて建庶人の輩 大内に幽禁されること、將に五六十年にならんとするを思い、竟に之を寛さんと欲す。李賢に謂い

て曰く、親親の義は、實に忍びざる所なり、と。[李] 賢 曰く、陛下の此の一念、天地鬼神の實に之に[来] 臨し、太祖の在天の靈も實に之に[来] 臨せん。堯・舜の存心 此の如きに過ぎず、と。左右 或いは以て不可と爲す。上(英宗) 曰く、天命有る者は、任じて自ら之を爲す、と。遂に鳳陽に居らしめ、有司をして柴米器用を供給せしめ、其の昏嫁<sup>ゆる</sup>を聴し、出入は自在ならしむ。[建] 庶人 禁に入るの時は方に二歳、是に至るに年五十六年なり。出でて牛馬を見ても亦た識らず。未だ幾ばくならずして、[建] 庶人 卒す。懿文太子及び建文君 皆な後無し(『皇明歴朝資治通紀(皇明通紀)』卷之十八・「戊寅天順二年」条)。

英宗は、土木の変でオイラートに捕虜になっていたとき、建文帝が亡くなってから、禮を以て遇されないことや、自分自身を憐れんでいた。復位して、建文帝の次子の建庶人などが、禁裏に五十六年も幽閉されたままになっていること

✓ (2) 英宗『實錄』は、もうすこし詳しく開放後の生活の手当ての状況を記録する。そして、それは英宗の「親親」の情からでたものであるという。

丙辰、建文君の子孫(『國權』卷三十二・「英宗天順元年・十月丙辰」条には、「建庶人文柱を釋す」とある)を釋し、鳳陽に安置す。太監の雷春等に勅して曰く、朕(英宗) 眷念するに宗室の至親は、在りて原<sup>たずね</sup>ずと雖も、亦た所を得しむ。今、太監の吳昱管を遣りて吳庶人及び其の母楊氏等共に一十八名口を送り、鳳陽に前去(行く)き居住せしむ。毎月、所司をして食米二十五石・柴三十斤・木炭三百斤を支與せしむ。軍民の家に於いて自から婚配<sup>ゆる</sup>を擇ぶを聴し、其の親戚は相い往來するを許す。其の餘の閒雜するの人は并せて各々の王府の往來交通を許さず。衣服・飲食に因るの類の若きは、街市に出でて交易・買賣するを許す。差出する内使の魯博・黃父住・劉敬・潘成・趙玉・韋州就と庶人看守門戶出入使の令爾春等は須要らく照顧防閑し、其れをして安分守法ならしめ、亦た宜しく禮を以て優待すべし。忽慢を得ること毋れ。朕の宗室を眷念するの意に副わんことを庶う。又た在廷の文武の羣臣に勅して曰く、朕(英宗) 恭しく天命を膺け、復た祖宗の大統を承け、夙夜憂勤し、天下羣生をして咸な其の所を徳とせんことを欲す。況んや宗室至親なる者をや。爰に建庶人等を念うに幼きより前人の累する所と為り、拘幽され今に至るまで五十餘年なり。此の遺孤を憫れみ、特に寬に従い貸用し是れ厚く賞賚を加え、遣人をして送りて鳳陽に至らして居住せしめ、月ごとに廩餼を給し以て其の生を安んず。仍お婚姻を聴し以て其の後を續けしむ。朕の親親を眷念するの意に副うるを庶う(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百八十三・「天順元年冬十月丙辰」条)。

を思い、「親親の義は、實に忍びざる所なり」と言い、赦そうとした。そして、反対意見もあったが、英宗自身が決断して、鳳陽に遷し、生活の手当てをした。建庶人は、幽閉されたのが二歳の時で、すでに五六十歳になっていた。牛馬を見ても分からなかった。しばらくして亡くなり、建文帝の子孫は絶えた、という。

### ⑤弘治年間

弘治六年（一四九三）には、呉世忠（字は懋貞。江西金谿の人。弘治三年庚戌科（一四九〇）二甲九名の進士）が、建文帝に殉じた人たちの名誉回復してもらいたいと提案する。

〔弘治六年（一四九三）二月辛酉〕兵科給事中の呉世忠〔以下のように〕言う。太宗皇帝（永樂帝）天を奉じて難を靖ずるの時、文臣の方孝孺・周是修・練子寧・黃子澄・鄒公瑾（鄒瑾）・魏公冕（魏冕）・顔瑰・齊泰諸人の如きは伏節（猶言殉節）するに死を以てす。然れども今に至るまで未だ褒表（表彰）に及ばず。闕典と為すに似たり。因りて言う、太宗（永樂帝）の天を奉じて難を靖ずるは乃ち武王の心なり。〔方〕孝孺諸人の伏節して義に死すは、則ち〔伯〕夷・〔叔〕齊の志なり。二者は固より並び行なわれ相い背かず。況んや仁宗皇帝（洪熙帝）の即位の初め〔方〕孝孺・〔鄒〕公瑾諸人の事に於いて俱に嘗て明著に詔書に其の忠義を稱して其の子孫に還して所を失わざらしむ。後、宣宗皇帝（宣德帝）の世に至り、凡そ諸々の恩意も亦た以て漸やく推舉す。今、天下の人 諸賢の忠義を景仰す。彼の如くして三宗の明識・遠度感嘆すること此の如し。伏して請う、之に爵諡を賜い、崇ぶに廟祀を以てし、其の子孫を録し、其の族屬を復し、以て士夫の節を勵まし、忠義の靈を慰めんことを、と。命じて其の奏を禮部に下す（『大明孝宗建天明道誠純中正聖文神武至仁大德敬皇帝實錄』卷之七十二・「弘治六年二月辛酉」条）。

①これについては「②洪熙年間」参照。

ただし、『明史』によると、この提案は、認められなかった。

[呉世忠] 請うらく、建文朝の殉難する諸臣を<sup>あわれ</sup>恤む。[また] 爵諡を賜い、崇びて廟食（功績のあった人を廟に祭る）し、且つ其の子孫を録し、其の族屬を復し、忠義の勸と爲さんことを乞う、と。章 禮官に下り、<sup>や</sup>寝めて行なわれず（『明史』 卷一百八十五・列傳第七十三・「呉世忠」傳）。

直接的に建文帝の名前を出して上奏がなされたのは、弘治十二年（一四九八）に楊循吉（字は君謙，号は蓬軒。江蘇呉縣の人。景泰七年（一四五八）～嘉靖二十三年（一五四四）。成化二十年甲辰科（一四八四）二甲十五名の進士）のものが最初のものである。楊循吉は、抹殺された建文帝の帝号を復活してもらいたいと提案する。

『國榷』には、『實錄』を節略して、つぎのように述べる。そして、楊循吉は、読書勉強したいために教官への転出を願い出るも許されず、三十歳で辞職する。この提案は、その十二年後になされたという。

[弘治十二年四月] 乙巳、前の禮部儀制司主事の楊循吉 建文君の尊號を復すこと景皇帝の故事の如くするを乞う。禮部に下す。[楊] 循吉 敏治（博学ですぐれる）にして、古文詞に工みなり。曹に居りて事 簡なれば、好みて讀書す。教官に改められ便養（親を扶養する）することを乞うも、許されず。遂に致仕す。年 僅かに三十なり。居ること十二年にして上書す。事は禮部に下さる（『國榷』 卷四十四・孝宗弘治十二年・「四月乙巳」条・二七三五頁）。

孝宗『實錄』によると、その提案は、つぎのようになっている。

致仕する禮部主事の楊循吉 奏すらく、臣 <sup>むかし</sup> 昔禮官を忝しめ、<sup>はずか</sup> 竊かに謂う朝廷の正名を上つるを先と為す。禮文 備わらざれば遠きに示す所以に非ざるなり。臣 聞くに洪武[年間]の後に建文君有り。乃ち太祖高皇帝（洪武帝）の嫡孫にして躬から神器を受け帝と稱し建號する者三年なり。其の後、天命 太宗文皇帝（永樂帝<sup>(3)</sup>）に歸し、遂に征討を興すの師入りて大統を正し、建文の位號を削れり。今百餘年なるに、未だ顯かに復するを蒙らず。夫れ建文 一時の左右する非人を以て罪を社稷に得と雖も、而れども

實は則ち生民の主なり。[それならば] 憲宗純皇帝（成化帝）の景皇（景泰帝<sup>①</sup>）を帝とするも以て廟に入れざるが若くするを以て法と為す可し。伏して望むらくは皇上 裁するに大誼（正道）を以てし仍お建文君の尊號を復すること景皇帝（景泰帝）の故事の如くせん。[そのようにして] 先聖を裨益し、大孝を光<sup>かがや</sup>かすこと有るを庶幾<sup>こいわが</sup>わん。上[孝宗弘治帝] 其の言を禮部に下す（『大明孝宗建天明道誠純中正聖文神武至仁大德敬皇帝實錄』卷之一百四十九・「弘治十二年（一四九九）四月乙巳」条）。

①兄の第六代皇帝の英宗が土木の変で捕虜になったため、第七代皇帝となる。英宗が帰還して、対立する。景泰八年（一四五七）または天順元年（一四五七）に景帝は重病となり、第八代皇帝として英宗は復位する。そしてまもなく景帝は歿する。するとすぐに景泰帝の帝号は、天順元年（一四五七）二月に剥奪され、郕王とされる。ただし、成化十一年（一四七五）に帝号は戻される。

✓（3）もともと永樂帝の廟号は「太宗」であったが、嘉靖十七年（一五三八）九月十一日に「成祖」に改められる。『世宗實錄』には、

復た惟れ太宗皇帝（永樂帝）は、克く太祖の洪業を成し、功備わり創守す。前の九月十一日に于いて、尊を加えて「成祖改天弘道高明肇運聖武神功純仁至孝文皇帝」と為す（『大明世宗欽天履道英毅聖神宣文廣武洪仁大孝肅皇帝實錄』卷之二百十八・嘉靖十七年十一月辛卯条）。

とある。

『明史』（乾隆四年〔一七三九〕刊本）には、

〔嘉靖十七年〕九月・辛巳、上（世宗嘉靖帝）〔永樂帝の〕太宗の廟號を成祖とし、〔世宗嘉靖帝の父親である〕獻皇帝の廟號を睿祖とす……（『明史』卷十七・世宗一）。

という。

明・王世貞の『弇山堂別集』（萬曆十八年〔一五九〇〕刻）卷六・「再上祖宗號」条には、

嘉靖十八年<sup>ママ</sup>、「太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝」の〔永樂帝の〕尊號を改め上りて、「成祖改天弘道高明肇運聖武神功純仁至孝文皇帝」と為す。加えて皇考（世宗嘉靖の父親）「恭睿淵仁寬穆純聖獻皇帝」に尊號を上りて「睿宗知天守道洪德淵仁寬穆純聖恭儉敬文獻皇帝」と為す。案ずるに、世宗（嘉靖帝）は、太宗（永樂帝）の配天を罷め、〔世宗嘉靖帝の父親である〕獻皇を明堂に宗祀（祖先への祭祀）し以て上帝に配せんと欲す。故に更ため置く所有のみ（『弇山堂別集』卷六・「再上祖宗號」条）。

とある。

洪武年間の後には建文君がいた。太祖洪武帝の嫡孫であり、統を承けて三年の間天下を統治した。その後、天命は永樂帝に移り、討伐軍が都に入り、統を正し、「建文」の年号を削った。それから百年あまりになるが、「建文」の年号ははっきりと復活されなかった。建文帝は、まわりの不心得者を用いたというものの、人々の主であったのである。だから、憲宗成化帝が、「景皇」といわれた景泰帝に「帝」を与えたものの、廟号を与えなかった先例のようにすべきである。陛下に正しき道によって建文帝の尊号を復活してもらうよう伏してお願いする、というのである。

「其の言を禮部に下す」とあるが、『明史』（乾隆四年〔一七三九〕刊本）には、楊循吉、字は君謙、呉縣の人、成化二十年の進士なり。禮部主事を授けらる。……性 狷隘にして、好みて人の短長を持し、又た好みて學問を以て人を窮め、頰 赤きに至るも顧みず。清寧宮 災ありて、詔もて直言を求む。馳疏もて建文帝の尊號を復せんことを請うも、<sup>とどめ</sup>格られて行なわれず……（『明史』卷二百八十六・文苑二）。

とある。提案は認められなかった。

また、焦竑（字は弱侯。南京旗手衛（山東日照）の人。嘉靖二十年（一五四一）～萬曆四十八年（一六二〇）。萬曆十七年己丑科（一五八九）一甲一名（狀元）の進士）の『玉堂叢語』につぎのようにいう。

楊守陳 嘗て言、謂う、國は滅ぼす可し、史は滅ぼす可からず。我が太祖既に〔天下を〕混一（統一）して、即ち儒臣に『元史』を修むを命ず。太宗（永樂帝）の靖難の後、史官 建文君の事を紀さず、遂に當時の朝政と事うる所に忠なる者をして皆な闕略して傳うること無からしむ。〔これは〕今に及ぶに猶お補輯す可し。景帝 已に位號を復し、「英宗實錄」に標目して猶お「郕戾王」と書す、是れ宜しく改正すべし。章疏は留中（留めおかれる）さる者となる。傳う可きものの有りと雖も、例として書するを得ず。史館に宣付（交付して処理する）せんことを乞う、と（『玉堂叢語』卷四・獻替）。

楊守陳(字は維新, 号は晉庵・鏡川・敬梅軒。浙江鄞縣の人。宣德五年(一四三〇)～弘治二年(一四八九)。景泰二年辛未科(一四五―)二甲五十四名の進士)は、靖難の後、史官は建文帝のことを記録せず、当時の事跡と忠臣とを伝えなくなった。これは、今補正すべきである。景泰帝のことも、すでに元どおりとなったのに、「英宗實錄」では「郕戾王」となったままである。これも訂正すべきである。また、この上奏文は保留されたままである。そのため伝えるべきことがあっても、規則上書くことができない。そこで、これを史館に送り届けてもらいたい、というのである。

『建文書法擬』<sup>(4)</sup>には、同文が引かれ、「弘治中」と付け加えられている。弘治年間のこととすると、楊守陳は弘治二年(一四八九)に亡くなっているのです、この発言は弘治二年までのこととなる。

鄭曉(字は窒甫。浙江海鹽の人。弘治十二年〔一四九九〕～嘉靖四十五年〔一五六六〕。嘉靖二年癸未科(一五二三)二甲四十三名の進士)の『今言』に、つぎのようにいう。

弘治中、台人の繆恭古を學びて行高(品性高潔)にして、晩年に京師に走り。上書して六事を上つる。其の一は、「絶屬を紀す」、建庶人の後を封じて王と爲し、懿文太子を奉祀せんことを請うなり。通政司官〔繆〕恭の奏を見て大いに駭き、〔繆〕恭を罵りて、蠻子、何ぞ自ら速死する爲す、と。〔繆〕恭を兵馬司の獄に繋ぎ、上に効して命を待つ。敬皇(孝宗弘治帝)の明聖に頼り、詔ありて罪する勿れ、〔繆〕恭を放ち郷に還せ、と(『今言』卷四)。

また、沈德符(字は景倩。浙江嘉興の人。萬曆六年〔一五七八〕～崇禎十五

---

(4)『建文書法擬』は、つぎのようになっている。

弘治中、楊守陳文懿公曰く、國は滅ぼす可し、史は滅ぼす可からず。我が太祖天下を定めて。即ち儒臣に『元史』を撰するを命ず。靖難の後、史臣建文君の事を紀さず。遂に建文の數年の朝廷政治及び當時の事うる所に忠なる者をして煙歿して傳わらざらしむ。今の采輯に及び尙お國史の關を補す可し(『建文書法擬』額・「述公議六條」条・十七葉)。



年〔一六四二〕萬曆四十六年〔一六一八〕の舉人)の『萬曆野獲編』にも、つぎのようにいう。

……弘治中、台州人の繆恭 京師に走り。上書して六事を言う。其の一は、建庶人の後を封じて王と爲し、以て懿文の祀を奉ぜんことを請うなり。通政司 大いに怒り。討死(自分から死を求める)を爲すと謂う。之を兵馬司に囚にし、以て其の疏を以て上つる。上(孝宗弘治帝) 罪せざるなり……(『萬曆野獲編』卷一・列朝・「園廟缺典」条)。

弘治中に、浙江台州の人の繆恭(字は思敬、号は守謙・責庵・小茅山餓夫)が、都にやってきて、六事を上奏しようとした。その一つは、建文帝の子の建庶人の子孫を王に封じて、建文帝の父の懿文太子の祭祀を掌らせよというのであった。繆恭は獄に繋がれたのであるが、孝宗弘治帝が放免したというのである。

#### ⑥嘉靖年間

嘉靖十四年(一五三五)七月乙酉に、楊僎が、建文帝に殉じた人たちの名誉回復を提案する。⑤で検討するが萬曆二十三年の楊天民の疏によると、「其の意は蓋し隱然と建文の地を為すなり」というものであった。それに対して、夏言が反対し、この提案は取りやめになってしまう。

楊僎の提案は、嘉靖『實錄』によると、つぎのようなものであった。

〔嘉靖十四年(一五三五)七月乙酉〕吏科給事中の楊僎(雲南臨安衛〔江蘇無錫〕の人。嘉靖五年丙戌科(一五二六)三甲三十五名の進士)〔以下のように〕言う。革除の變の時、當事の臣の尚書の鐵鉉・張統・陳迪・齊泰、侍郎の卓敬・胡子昭、都御史の景清・陳子明(『建文書法擬』などによると「練子寧」のこと)、太常寺卿の黃子澄、侍郎の方孝孺<sup>など</sup>等の若きは、均しく能く奮いて身を顧みず、義を以て自から殉じ、死を視ること歸るが如し。勢いの為に屈せず。而して忠卹を録する後、尚お缺典と為す。乞う〔鐵〕鉉<sup>など</sup>等の忠に死せし實蹟<sup>も</sup>を將<sup>も</sup>って史局に付し編集し、諸<sup>これ</sup>を不朽に垂らし、仍お各々官諡を追贈し、其の子孫を録用し、在る所の有司をして祠宇を創立し

時を以て享祀せん、と。事 禮部に下す（『大明世宗欽天履道英毅聖神宣文廣武洪仁大孝肅皇帝實錄』卷之一百七十七・「嘉靖十四年七月乙酉」条）。靖難の時に殉じた人たちは、そのままとなっている。そこで、名誉回復を行うべきだというのである。

それに対して、夏言（字は公謹。江西貴谿の人。正徳十二年丁丑科〔一五一七〕三甲三名の進士）等は、つぎのように批判する。

尚書の夏言等 言う、稱する所の革除とは實に我が太宗文皇帝（永樂帝）の靖難の時の中の間を指す。列する所の事に死する諸臣は固より一時の自から其の心を盡し以て臣節を建文君に明らかにする者有り。[しかし]齊泰・黃子澄の輩の若きは、則ち是れ當時の國を誤り罪有るの人なり。太宗文皇帝（永樂帝） 其れ君側の惡の如しと名いい、其の罪を聲して、之を誅する者なり。具さに「實錄」に載せれば、昭然と考うる可し。我が太宗（永樂帝）の「天に應じ人に順う」（『易』革卦・彖傳）にして、内に靖<sup>やすん</sup>じ外に攘うに頼るに非ざれば、則ち我が高皇帝（洪武帝）の萬世帝王の業は當に未だ知何れの所に底定（安定）するかを知らず。此れ我が太宗（永樂帝）の神功聖徳の宜しく百世不遷の宗と為る所以なり。今の奏する所は是れ徒だ野語の流傳の訛のみを聞きて、「國史」の直書するの信ず可きを知らず。況んや表勵の典 太宗（永樂帝）の時に在れば或いは可なり。今日に在れば則ち不可なり。[楊] 傑は實に新進の儒生なり。忌諱を識らず。據る所の奏の内の事理 實に准し難し。議上するに[楊] 傑の事體を諳<sup>しら</sup>ず、輕率に進言するを責めるも姑く之を宥す、と（『大明世宗欽天履道英毅聖神宣文廣武洪仁大孝肅皇帝實錄』卷之一百七十七・「嘉靖十四年七月乙酉」条）。革除というのは、靖難の時のことをいう。楊傑が持ち出した人々は、建文帝に忠節をつくした人たちがいる。しかし、齊泰・黃子澄などは、國を誤った人物である。そのため、永樂帝が名指しで批判し、誅したのである。それは、「實錄」をみればはっきりする。永樂帝が、内外を正さなければ、洪武帝の事業はどのようになってしまったか分からない。これが、永樂帝が永遠に称えられる理由

である。楊傑の提案は、野史の間違いだけによってしまっている。ましてやこの殉難した人たちを表彰することは、永樂帝の御世であればかまわないが、今となってはできない。楊傑は、なりたての官僚であるから、忌諱を知らないのである。提案は、認められない。軽率な提案は責めるべきであるが、それを許す、というのである。

(つづく)

[訂正] 拙稿「崇禎帝の諡号について」(3)を発表のあとで、諡の字数についての誤りに気づきました。そこで、『経済理論』第三百五十三号掲載の拙稿「崇禎帝の諡号について」(3)の注(1)・111頁・121頁を以下のように改めてください。

109頁24行～28行

誤：

ただし、ここでいう「十六字」は、いわゆる尊号の字数であり、廟号の後に付す一字の諡は、含まれていない。したがって、廟号を除くと、『明史』でいうように、十七字となる。

正：

ただし、ここでいう「十六字」は、いわゆる尊号の字数であり、一字で十六字を統べる本来の諡は、含まれていない。したがって、この十六字を統べる一字の本来の諡を含めると、『明史』でいう十七字となる。

111頁7行～8行

誤：

つづいて、廟号に擬撰された文字について検討してみたい。まず、廟号に附せられた「烈」字についてである。

#### ①烈

(1)で検討したように「烈」字は、いずれの廟号にも附せられており、これについては、余燧を除いて、反対意見はなかったようである。

正：

つづいて、廟号に擬撰された文字について検討してみたい。まず、十六字を統べる一字の本来の諡の「烈」字についてである。

なお、王弘撰（字は無異，又の字は文修，号は山史，又の号は待庵。陝西華陰の人。明・天啓二年〔一六二二〕～清・康熙四十一年〔一七〇二〕）の『山志』によると、

帝王の諡有るや，古は或いは一字を用い，或いは二字を用う。今の制は，帝の諡は一字なり，而して上に更に十六字を用う・・・（『山志』初集卷四・「諡法」条）。とある。

さらに、査繼佐（字は伊璜，号は東山。浙江海寧の人。明・萬曆康熙六十一二十九年〔一六〇一〕～清・康熙十六年〔一六七七〕）の『罪惟録』によると、

初め定制，皇帝の崩じ，諡を工するに，率ね十六字，摠ぶるに一字を以てす。皇后は十二字を用い，帝の諡の統ぶるに一字を以てするに従う。後，嘉靖中に改めて高皇帝に二十一字・皇后に十五字を加う（『罪惟録』卷之七・志・諡典）。という。つまり，明朝において，皇帝に贈られた十七字の諡号のうち，最後の一字が十六字を統べる本来の諡であり，そのうえの十六字は，増加された諡（尊号）ということになる。崇禎帝の場合，この「烈」が本来の諡となる。

#### ①烈

（1）で検討したように十六字を統べる一字の諡の「烈」字は，余煜を除いて，反対意見はなかったようである。

121 頁 6 行

誤：

なお，廟号の後に付された「正」字については④参照。

正：

なお，十六字を統べる一字の本来の諡である「正」字については④参照。